

バナナの皮悲劇

伊東翼

【登場人物】

あかり

あかりの後輩

ある女（22歳の大阪の女の子）

母

男（夫）

向坂薔薇子

【あらすじ】

夜のさみしさについての演劇です。一口に夜のさみしさと言ってもいろいろあります。一人寝の夜のかけ布団のさみしさだとか、雨のタクシーの窓に溶けたネオンのさみしさだとか、歩いてることのさみしさだとか、止まっていることのさみしさだとか、人がいないことの孤独もあれば、人のしがらみゆえの孤独もあると思います。

夜のさみしさについて考えるとき、そこには「どうしてこうなった」的な、運命に関する漠然とした考察と、漠然とした怒りがあると思います。どこまでが自分の自由意志で、どこまでがただただ運命なのか、個人的な我が生活に関してもそれを考えてしまいますし、ニュースで流れるできれば知りたくなかった惨事にも、そんなことを感じます。

それは「バナナの皮悲劇」です。世界じゅうのいたるところに誰かが捨てたバナナの皮が落ちていて、滑って転んで悲劇になります。チャップリンは「近くで見れば悲劇、遠くから見れば喜劇」と言いましたし、好きな言葉ですが、今回は「近くで見れば悲劇」側の演劇をやってみたいと思います。バナナの皮で滑っても、やつぱり当人には悲劇。

夜のさみしさは、喜劇に変身するのが疲れた悲劇たちのさみしさでもあると思います。地球人の生活はなかなかどうして悲劇に満ちています。インフルエンザも悲劇だし、遅刻するのも悲劇だし、なにかに飽きてしまうことも悲劇だし、なにかに執着してしまうことも悲劇だし、もちろん死ぬのも悲劇です。本当の死の向こう側のことはわかりませんが、かりそめの死は、人生にたくさん訪れます。かりそめの死と、その密かな再生の物語です。

あかり、懐中電灯の灯りに照らされる。

あかり「まぶしっ！ 生きるって、まぶしっ！ 今日の朝、つまり今朝、わたしと同一年の22歳の大阪の女の子が、たまたま道を歩って、たまたまアロエの植木鉢が頭から降ってきて、死んだ。それはこんな植木鉢だった（絵を見せる）。見ず知らずの女の子とはいえ、わたしと同一年であるだけに、悲しかった。大阪の女の子。おそらくたこ焼きを少なくとも一回は食べたことがあったろう女の子。そこには、どんな反省がある？ もちろん、ベタンダで鉢植えを育てることを至上の喜びとする者にはそれなりの反省があるだろう。どんなに健康的な植物だって、たとえアロエだって、植木鉢に入ってて頭の上から落ちてくれば、からだにいいわけがない。さて、女の子には、どんな反省がある？ 道を歩ってただけである。わたしはちよくちよくこう伝え聞いている。人生は、暗く惨めな局面もあるが、そこを踏ん張って、またその暗闇からなにかを学ぶことができれば、きつとふたたび夜明けはやってくるはずだと。そしてその時わたしは以前よりももっと強く、もっと賢いわたしになっているはずだと。……ふうむ。残念ながら、それはこの女の子には当てはまらない」

22歳の大阪の女の子、いつのまにかそこに立っている。

22歳の大阪の女の子「えー」

あかり「これがたとえば、シマウマならば納得である（22歳の大阪の女の子、シマウマになる）。いきなりライオンが飛びかかってきて、首の根っこに噛みつかれ、さよならも言えないうちに息絶えたとしても、それはある意味当たり前、なんだろう、腑に落ちる！

（シマウマ、ライオンに襲われ、死ぬ）

シマウマ「ウツ…、じょーずにしねました！」

ライオン・シマウマ「ありがとう！」

あかり「いやいや、しかし彼女は女の子である。純然たる女の子である。こんなに自然に、選択の余地も反省もなく、自然によって淘汰されてよいものであろうか。もちろん答えは、NOである」

22歳の大阪の女の子「NOOOOOOOOOOOOOO！」

あかり「(Oを引き継ぎ)おーっといや待て、そもそも動物と人間のちがいはなんだろう。文明、文化、ヒューマニズム。人類が人類を教育している。ちよっと待て待て、それら

がもし、あまりにもかりそめで、幻で、絵に描いた餅で、嘘っぱちで、吹けば飛ぶようなものだとしたら、だからその、夢だとか未来だとか『この世界で生きるに値するなにか』だと教えられてきたものがすべて、ただただこの星の夜のこわさから目を背けるための目隠しだとしたら、ああもう映画なんて信用できない。チャップリンだってキチガイだ。ナショナルジオグラフィックTVでライオンがシマウマを食べるところでも見てたほうがよっぽどいい。結局のところ、いつか死ぬということ以上に明確なものはほかにないし、やっぱりわたしもシマウマよろしく、最後はさよならも言えないままに淘汰されるのだ」

あかりの後輩「ねえ！ あかり！ あんた名前があかりなのに、なんでそんなに暗いの？」

あかり「あなたが明るすぎるのよ、あかり」

あかりの後輩「あんたあかりの先輩でしょ。今んとこ、あかりの最年長でしょ。だったらもっと明るくいてよ。前向きでいてよ！」

あかり「あなたこそ、あかりの後輩なら、あかりの先輩には敬語を使ったらどう？」

あかりの後輩「なんで自分に敬語使わなきゃなんないのよ」

あかり「なんで自分に暗いなんて言われなきゃならないのよ」

あかり・あかりの後輩「ふん！（そっぽを向く）」

あかりの後輩「……あ、そーえば前にお母さんが、寝る前に窓から手を伸ばして、夜空を飛ぶ飛行機をひよいと取ってくれたことあったよね」

あかり「ひよい？ なにそれ」

あかりの後輩「あったじゃん！ ついこないだ！」

あかり「あなたにはこないだかもしれないけど、わたしには遠い昔、はるか彼方の銀河系」

あかりの後輩「じゃあおしえてあげる。お母さあん！」

母「しーっ。夜に騒ぐと、ピーマン男が来るよ」

あかりの後輩「もう、やめてよ」（母のひざに頭をのせる）」

母「（頭をなで）よしよし。いいいいね」

あかりの後輩「あ！ UFO！」

母「え？」

あかりの後輩「ほらあそこ！」

母「あー、あれは、飛行機よ」

あかりの後輩「えー！ 絶対UFOだって」

母「賭ける？」

あかりの後輩「え、消しゴムなら……」

母「だめよ。消しゴムは大切にしないさい。大切にできるものは、みんな大切にしないさい」

あかり「むかしのあたしは、いまのわたしより目がくりくりしてて、世界がよく見えた」

あかりの後輩「あ、ほんとだ」

母「ね」

あかりの後輩「飛行機」

母「ちよっと、取ってあげようか？」
あかりの後輩「え？」
母「よいしょ（手を伸ばし）、ひょい（おもちゃかなにかのように夜空から取り出だす）」
あかりの後輩「うわー」
母「ね？ はい（あかりの後輩の手に乗せる）」
あかりの後輩「え、いいの？ おー、すっごーい！ 人がたつくさんいる」
母「人がたつくさんいるでしょう（なんとなく観客も意識する）」
あかりの後輩「うん！ 人がたつくさんいる」
母「みんな、死ぬのよ、いつか」
あかりの後輩「ん？」
母「みんな、いつか死ぬの」
あかりの後輩「うん」
母「あ、そんな風を持ちちゃだめ。墜落しちゃうわ」
あかりの後輩「おお、ごめんごめん。こんな感じ？」
母「うん。そんな感じ。あの、生まれるのと同じように、死ぬのも奇跡なのよ」
あかりの後輩「え。どう、奇跡？」
母「ビールのCMでさ、旬な俳優かなんかが、ぐっぐっぐっぐっ……プハッ！ って言うてるでしょう」
あかりの後輩「うん。ビールのCMで旬な俳優かなんかが、ぐっぐっぐっぐっ……プハッ！ って言うてる」
母「でしょう。お母さんね、人生っていわば、あのぐっぐっぐっぐっの部分だと思うのよ」
あかりの後輩「じゃあ、プハッは？」
母「死んだ後の、お楽しみ。さあ、もう寝なさい。眠りはいい。眠りは小さな、死さ」
あかりの後輩「あ、これ」
母「まあ！ いけない忘れてた。夜空にお返ししましょう。（そっと返し）ハブ・ア・グッド・フライト、ウイズ・ザ・ムーン！ バイ！ （手をふる）」
あかりの後輩「あの人たち、みんな、死ぬの？」
母「うん。死ぬ。絶対に死ぬ」
あかりの後輩「いつ、死ぬの？」
母「あの飛行機が今夜墜落しないかぎりには、みんな、一人ずつ、孤独に、死ぬ。世界では一日に2千人の人が自殺し、4千人の人が車に殺され、2万人の人が心臓発作で死ぬの。おやすみなさい」
あかりの後輩「おやすみなさい（目を瞑る）」
母「……寝た？ ……寝た？ ……おーい……私、たまに死んだ人のことがうらやましくなるの。死んだ人はもう、間違えずにすむから。恥かかなくてすむから……愛してるわ」
あかり「思い出した。わたしあのととき、必死に寝たふりをしていた」

あかりの後輩「お母さん、なんであんなこと言ったんだろうね。不思議な夜だったよね！」
あかり「まったく嫌なこと思い出させてくれたわね。もうあっち行ってよ！ しっしっ！」
あかりの後輩「ひどい！ ねえねえ、いっしょに遊ぼうよ」
あかり「いやよ」
あかりの後輩「なんでー？」
あかり「あなたのことが、嫌いなもの」
あかりの後輩「……あたしだって、あんなこと大っ嫌い！」

あかりの後輩、立ち去る。あかり、夜の町をぼつりぼつり歩く。男と出くわす。

男「謎の光線であかりを照らす」

あかり「ちよつと、やめてよ」

男「見える？ 星」

あかり「星？ 見えるけど？」

男「見えるよね、星。でも名前がわからない」

あかり「名前まではわからなくていいんじゃない？ 少なくとも逆よりはまし」

男「逆って？」

あかり「名前だけ知ってて、姿が見えないよりはまし」

男「それって、今のぼくたちのこと？」

あかり「ぼくたち？」

男「ぼくときみ」

あかり「は？」

男「名前は知らないけど、きみという星は見えてる。ぼく、田所。田所シン」

あかり「田所シン……」

男「きみは？」

あかりの後輩「あかり！ 高円寺あかり！」

あかり「ちよつと」

男「あかり？」

あかり「え？ なんか聞こえた？」

あかりの後輩「高円寺の高に、高円寺の円、高円寺の寺で、高円寺！ あかりはひらがな！」

男「高円寺あかり」

あかり「違います」

あかりの後輩「ほんとだよ！」

あかり「ちよつとわたしは昔のあたし、黙ってて」

あかりの後輩「黙らなさい」

男「元気だねえ！ まるで発情期の猫みたいだ！」

あかり「は？」
あかりの後輩「みやおくん！」
あかり「いい加減にして！」
あかりの後輩「あたし、この男が好き」
あかり「わたしは嫌い。いちばん嫌い」
あかりの後輩「いっしょにいたら楽しそうだよ」
あかり「さほどでもないでしょう。変態かもよ」
男「(腕の上に指人間をのせ) 見て！ これ、ぼくの指人間！ いまから、月に飛ぶよ！」
あかり「ね？」
あかりの後輩「あ」
男「あっ」

指人間、男の腕から飛び降りる。すつと舞い上がり、月に着く。

男「月に着いたよ」
あかりの後輩「着いたって」
あかり「ばっかみたい」
男「きみもおいでよ」
あかりの後輩「おいでって」
あかり「行くもんですか」
あかりの後輩「あたし行っちゃおろ(指人間をつくり、月に行こうとする)」
あかり「それを止めながら) だめだめ行っちゃだめ」
男「おいでよ」
あかりの後輩「いくいく」
あかり「だーめ！」
男「おいでよ」
あかりの後輩「いく！」
あかり「あっ！」

曲。

あかりの後輩の指人間、舞い上がり、月へ飛ぶ。

あかり「その夜。わたしと同年の22歳の大阪の女の子がたまたまアロエで死んだ朝の夜、わたしはしぶしぶ、恋に落ちた。いや、落ちたんじゃない。むしろ、舞い上がった。わたしは恋に、舞い上がった」
あかりの後輩「月に着いたよ！」

男「ようこそ、月へ」
あかりの後輩「合体しましょう」
あかり「ちよつとなんてこと言うの！」
母「みんないつか死ぬのよ」
あかりの後輩「え、なにが？」
あかり「合体なんてしないわ」
男「四の五の言わずに合体しよう。ガンダムみたいに」
母「合体なさい」
あかりの後輩「お台場のガンダムみたいに」
母「みんな死ぬ」
22歳の大阪の女の子「あーあ」
男・あかりの後輩「お台場のガンダムみたいに！」
男「男と女」
母「もう寝なさい」
あかり「合体合体って、合体していったい、誰と闘うのよ！」
あかりの後輩「この夜とよ！」
あかり「夜？」
あかりの後輩「このつまらん夜と闘うの！」
あかり「勝てないよ」
あかりの後輩「わかんない！ やってみなきゃわかんない！」
母「ぐっぐっぐっぐっぐっ…プハッ！」
あかり「あっそう！ じゃあいいわよ。夜に勝てるかどうか、やるだけやってみようじゃないの。ガシーンで。ガシーンで！ ガンダムみたいに、お台場のガンダムみたいに、出会ったばかりのこの男と」
男「田所シン」
あかり「田所シンと！ 田所シンとお？ あ田所シンと！ 合体して合体して、この夜と闘おうじゃないの」
男・あかりの後輩「ぐっぐっぐっぐっぐっ」
あかり「ねえ！」
男「なに？」
あかり「わたしの中にあるバスタブから、いい湯加減の魂が、うっかり流れ出さないように、あなた栓をしてよ。ちゃんと、わたしに栓をして。わたし空っぽのバスタブなんかに浸かりたくない。そんなの、寒いもん。風邪ひいちゃうもん」
あかりの後輩「死にたくないな」
男「わかった。ぼくがきみに、栓をするよ」
あかり「うん」

男「おいだきも、するよ？」
あかり「うん。あつ」
あかりの後輩「おー」
男・あかり「ぐっぐっぐっぐっぐっぐっ」
22歳の大阪の女の子「……プハ〜」

なんとなくみんな、横になる。だらだらする。あかり、雑誌などをばらばら見ている。
男改め夫、iPhoneをくいくい見ている。

夫「あれ？ 今年で結婚して何年？」

あかり「三年でしょ」

夫「そうだ。え？ あ、三年目ってことか」

あかり「うん三年目」

母「(ここではないどこかで正座している) おめでとう」

あかりの後輩「まさか結婚するとは思わなかったわ。でもまあ、結婚してよかったと思う」

あかり「あー、今月お母さんのお見舞い行っていない」

夫「いこいこ」

あかり「いつ行こうかなー」

夫「(それからまた会話がなくなり、夫はiPhoneを見ていたが、ふと) なんじゃこりゃ」

あかり「どうしたの？」

夫「んー、あの、携帯に勝手に出てくるニュースあるじゃん」

あかり「あーうん」

夫「今年また中東に自衛隊を派遣するっていうニュースがあつて、関連する記事とかいま見てただけど、ヤバイ」

あかり「え。でもあれだよな、自衛隊は兵士ではないもんね。死にはしないよね」

夫「あのー、戦場では死んでないんだけど、イラクに派遣された自衛隊のうち、54人が自殺してる」

あかり「ほんと？」

夫「うん。(画面を見ながら) 派遣前に精神面で問題なしとして選抜された隊員がこれほど自殺しているというのは、かなり高い数字……ということですね」

あかり「マジか」

夫「うん」

夫、おもむろに歯を磨きだす。あかり、タオルケットを綺麗に畳む。

夫「(歯ブラシを口に含みながら) じょーくきく？」

あかり「え？」

夫「(依然として口に含みながら)じょーく。きく？」

あかり「ジョーク？ え、アメリカの？」

夫「うん、そおそお。きく？」

あかり「うん。きく」

夫「あるおほこが、まちで、あるよんなにこへをかけた」

あかり「ある男が、町で、ある女に声をかけました」

夫「うん。おほこはよんなにこういいまひは。』おじょーさん、おくといっしょにこーひー

あもおみみいみまめんま？』」

あかん「はい？」

夫「おじょーさん」

あかり「お嬢さん」

夫「おくといっしょに」

あかり「僕といっしょに」

夫「こーひーあもいみみいみまめんま？」

あかり「コーヒーでも飲みに行きませんか？」

夫「おお！（拍手）」

あかり「歯磨きの後でもいいのよ」

夫「よんなはこういいまひは」

あかり「女はこう言いました」

夫「(えずく)おえっ」

あかり「歯磨きの後でもいいのよ！ 歯磨きしながらジョークを言うのは難しい。自転車

に乗りながらアイスクリームを食べたり、暗算しながらキスするくらい難しい」

夫「よんなはこういいまひは」

あかり「女はこう言いました」

夫「『ありらろろう。えも、えんろしておくあ』おえっ」

あかり「ありがとう。でも、遠慮しておくわ」

夫「(拍手)」

あかり「男、振られちゃったね」

夫「おほこはさらにつるけあす」

あかり「男はさらに続けます。おお、男しっこいな。大丈夫か」

夫「『かいしあいであらさい。おくはあれかれかまあずおえをあけてるわけあーぬあいん

えす』」

あかり「誤解しないでください。ぼくは誰かれかまわらず声をかけてるわけじゃないんです」

夫「(指を鳴らす)」

あかり「うん。それで？」

夫「よんなは」

あかり「女は」

夫「『やーら、あなたこほごかいしあいでもーらい。あらしらってあれかれかまわずことううるあけあないおお？』(息を吸う)」

あかり「あーら、あなたこそ誤解しないで頂戴。わたしだって、誰かれかまわず断るわけじゃないのよ」

夫「(無言で歯を磨く)」

あかり「あ、おわりだ。いまのがオチだ。おー、なるほど。いいね」

停電。電気がぱつと消える。

あかり「わっ！ 停電だ！ あれ？ 停電だよね？ あなたー」

夫「(シヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカ)」

あかり「ねえ、ブレーカー上げてくれる？」

夫「(シヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカ)」

あかり「おーい」

夫「(シヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカ)」

あかり「もう歯磨きは、しないで」

夫「(シヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカ)」

あかり「あつそう。そんなに虫歯がこわい？ いいわよわたしがブレーカー上げるから。

はい、ガッコン！ ……あれ？ 電気が点かないわ」

夫「(シヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカ)」

あかり「ちよつと！」

夫、歯磨きをしながらあかりを追いまわす。逃げるあかり。

あかり「なに！ なになに！ シヤイニング？ やめてよ！ こっちくん！ あ、なんだこれ。おつ、いい握り具合。おにぎり？ いいや、懐中電灯だ！」

あかり、夫のシヤカシヤカめがけて懐中電灯を灯す。しかし、そこには誰もいない。

あかり「え？ いない。わたしは消えた夫のあとを追い外へ出た。外は木星のように暗く、水星のように冷たく、火星のように無人だった。さしあたり月も星も見えず、見渡せど街灯の一本さえ、コンビニの一軒さえ、信号の赤青黄色さえもなく、町にはただ、ただ闇ばかりがあつた」

あかり、懐中電灯片手に世界の四隅を照らしながら、おそろおそろ歩く。ふいに光が人の姿を捉える。その人は、花壇のレンガの縁に腰かけ、髪を華厳の滝のように垂らして顔を隠し、うつむいている。手には、白くて小さめのビニール袋を提げている。どうやら中にはプリンが数個入っているようだ。あかり、彼女に近寄り話しかける。

あかり「あの、こんばんは」

ある女「(顔を上げず) はい」

あかり「この停電について、なにか知ってますか? 町中が停電みたい」

ある女「ええ」

あかり「あ、大丈夫ですか。具合でも悪いんですか」

ある女「いえ。別に」

あかり「……(Phoneで夫に電話するが、繋がらない)だめだ。ケータイも通じないや」

ある女「あの、プリン、食べますか?(一個出す。りんごのように)」

あかり「あ、大丈夫です」

ある女「プリン」

あかり「いえ、結構です」

ある女「大丈夫ですよ。わたしプリン、複数個持ってますから。複数個。複数個。わたし

は一人なのにな」

あかり「……」

ある女「あの、それはそうと、闇と聞いて、漢字逆じゃないですか? 漢字漢字。闇と闇」

あかり「漢字?」

ある女「だから、闇と闇! (舌打ち) 闇は、門の中に、音でしょ?」

あかり「はい」

ある女「んで、闇は、門の中に、日、でしょ?」

あかり「はい」

ある女「逆じゃないですか? 闇と闇。漢字」

あかり「え、どういうこと」

ある女「なんでわかんねえんだよ! バーカ!」

あかり「……」

ある女「ごめんなさい。ひどいことを言った。プリン、食べますか? すりおろしますか?」

あかり「やめてください。大根じゃあるまいし。あるめえし」

ある女「は?」

闇。

あかり「……闇は音が閉じ込められてて、闇は、日、太陽が閉じ込められている。ほんと

は太陽がないのが闇で、音がないのが間なのに。たしかに、逆ですね」

ある女「わかればいいんです、わかれば。今年、ロシアがインドに原発を輸出したんです。寒い国が暑い国に原発を送ったんです。でも、その原発、もともと日本がインドに輸出するはずだったんです。〆二の二年後にはもう、総理大臣が中東まで営業に出かけて、

『日本の原発は世界一安全です』なんて言ってたんです。プリン食べましょう、プリン」

あかり「夫がいなくなっただんです」

ある女「そうですね」

あかり「夫は、わたしがいないと、だめなんです」

あかりの後輩「夫がいないとあんたがだめなんですよ？」

あかり「それはあなたでしょ」

あかりの後輩「つまりあんた」

あかり「あなた」

あかりの後輩「あんた！」

ある女「どうして男がいなくなったのか、思い当たるふしはありますか？」

あかり「ないんです」

あかりの後輩「ある」

あかり「え、なに？」

あかりの後輩「出前頼んだ時」

あかり「だってあれはもう」

ある女「なに？　なんの話？」

あかりの後輩「あたし回想やるよ」

あかり「いいよいいよ」

ある女「あ、見せてください」

あかりの後輩「おーい、回想の田所シーン」

回想の夫「へいへい、回想の田所シンでございあす」

あかり「誰！？　夫じゃないわ」

回想の夫「ひっひっひっ」

あかりの後輩「だって夫は消えたもの。この人にやってもらわうしかないじゃない」

ある女「よし、やってくれ」

あかり「もう……それは、9月のある日」

リビングである。夜である。

回想の夫「きみは！　浮気をしている！」

あかりの後輩「だからしてないって！」

回想の夫「強情な！　ぼくはたしかに聞いたんだ。あの電話！　あの会話！」

あかりの後輩「あの日、あなたは帰ってこなかったじゃない！」

回想の夫「いいや実は帰っていたんだ実は！ このリビングの、玄関とリビングを仕切るドア！ このドアの向こう側から、すりガラス越しに聞いていたんだあの会話！」

あかりの後輩「フェアじゃないわ！」

回想の夫「どっちが？」

あかりの後輩「ドアを開けてくれたらよかったじゃない！ そしたらすべてはそこではつきりしていたのに！」

回想の夫「きみが浮気をしていることがかい？」

あかりの後輩「だから違うたら！ もうイヤ」

回想の夫「あんなに直接的かつ情熱的な、愛のコトバ！」

あかりの後輩「だからあれは！ ただ出前を頼んでいただけなんだったって！」

回想の夫「詭弁だな！ 詭弁和歌山だな！ 詭弁和歌山高校だな！ 詭弁和歌山高校吹奏

楽部だな！ 吹けよ！ はやく吹けよ！」

あかりの後輩「なにを？！」

回想の夫「ホルンを！」

あかりの後輩「わたしホルンなんて吹けない！」

回想の夫「ホルン！ ホルン！」

あかりの後輩「ホルンは吹けないのよあなた！」

回想の夫「ホルン！ ホルン！ ホルン！」

あかりの後輩「ホルンがあれば吹きましようぞ！ まずはこの屏風からホルンを出してください！」

回想の夫「一休じゃねえか！ 一休じゃねえか！ 一休じゃねえか！ 一休じゃねえか！」

あかりの後輩「落ち着いてよ。あなた、落ち着いて！」

回想の夫「落ち着いていられるかってんでやんでえ！ あれが出前の電話なわけがあるかいなアルカイダ！ いいか。きみはこう叫んでたんだぞ。『ああ、好きすぎて好きすぎてもう死にそう。早くきて』、きみはたしかに！ そう言っていた！」

あかりの後輩「だからあのときは！ ……（ある女に）あのすいません、回想の中の回想やってもらっていいですか？」

ある女「わたし？ わたしこの件について知らないけど大丈夫？」

あかりの後輩「大丈夫です。わたしいま、あかりの回想やってるんで、あなたはあかりの

回想であるわたしの頭の中の回想をやってください」

ある女「あはい」

あかり「わたしがどんどん増えていく……」

あかりの後輩「だからあのときは！ こういうことだったのよ！」

ある女（電話に）ああ、好きすぎて好きすぎてもう死にそう！ 早くきて！」

回想の夫「ほら見ろ！ やっぱりこう言ってるじゃないか！」

ある女「違うのよ。これは、おなかが！ おなかが空きすぎて空きすぎてもう死にそうって意味なの！」

回想の夫「はあ？」

ある女「(あかりに) ちょっとあなた、わたしの頭の中の回想やってもらってもいい？」
あかり「ええ?!」

ある女「あなたの回想の、回想の、回想」

あかり「あはい。あー、おなか空いたなあ。中華の出前とろう。ピポパポピ。もしもし？ 麻婆井と担々麵をお願いします。はい。何分くらいで？ 30分。わかりました。と言って待つこと、あ1時間！ きやしねえきやしねえ。腹の虫がピーピー泣いてやがる。わたしは弱虫でも泣き虫でもない。かと言ってこの遅さを無視できるほど無心ではない。蒸し暑い夜だ。虫唾が走る。このままじゃ虫の息だ。蒸しパン食おうかむしやむしやと。あ待ていや待て虫歯になる。あ、虫がいる。羽を筆る。いつもは虫も殺さぬわたしだが、虫の居所が悪かった。虫の知らせもないからして、ちよつくら電話で、事を蒸し返そう」
ある女「とうるるるるるるるるる、とうるるるるるるるるる、とうるるるるるるるるる」

夫「(マグカップ片手に) このように人は、回想をします。そしてまた、回想の中の自分も

また、なにかを回想しているものなのです。その中の自分もまた、なにかを回想してる。

回想、回想、回想、かいそうかい、そうかい、そうかい！ そうなかい！ 我々は、つねに過去を患い未来をあぐねる、記憶のタイムトラベラーなのやもしれません。その夜の明け方、家に帰ると、玄関の前に井ぶりが二つ出していた。浮気相手と食べたのだ！」

あかり「わたしが一人で食べました！ 麻婆井と担々麵！ 麻婆井と担々麵！」

夫「一人で麻婆井と担々麵を食うやつがあるか！」

あかり「だからおなかが空きすぎて空きすぎて死にそうだったのよ！ わたしの胃袋は、そのとき宇宙のように大風呂敷を広げていたの」

ある女「好き！ 大好き！」

夫・回想の夫「おいおいおいおい、ちよつと待て！ ウィーンガシヤ、ウィーンガシヤ、スミダガワ〜」

回想の夫「回想の回想のお前！ 大好きって言っちゃってるじゃないか！」

夫「いくら腹が減つてるとはいえ、空腹のことを『空き！ 大空き！』とは言わないだろ」

あかり・あかりの後輩「言ってないわ。そんなこと」

夫・回想の夫「いや聞いた！ たしかに聞いた！」

あかり・あかりの後輩「どの耳で？」

夫・回想の夫「この耳で」

あかり「それが耳？ キッズケータイかと思ったわ」

夫「言っってくれるじゃないか」

あかりの後輩「あー、もうやめやめ！ 男たち帰って！ やんなっちゃう(夫たち、帰る)」
ある女「なるほど。だいたいわかったわ」

あかりの後輩「どう思いますか？」

ある女「あなたの夫は、動物園にいるわ」

あかり「え、どうして？」

ある女「わたし今夜は、ずっとこの花壇に座っていたの。だから見たのよ。あなたの夫がトヨタのバンに乗るところ。車のよこにZOOって書いてあった。ZOOって動物園でしょ？」

あかり「なんでそれを早く言わないのよ」

あかりの後輩「行こう！」

あかり「でも場所がわからない」

ある女「わたし知ってるよ？ 二人を案内してもいいけど、まずはプリンを食べましょう」

暗転。暗闇の中、プリンを食べるような音が聞こえる。動物の鳴き声が混ざってくる。

ある女「ん？ 22歳の大阪の女の子？」

あかり「あ、なんでもないです」

ある女「アロエって？」

あかり「気にしないでください」

ある女「アロエってさ、傷に塗るといって言うじゃない？ 果肉の部分をか。だけど、アロエの表面はギザギザしてて、恐竜の尻尾みたい！ アロエの内側は人を癒すけど、外側は人を傷つける。それって、それってなんだか、まるでわたしみたいなんだよね」

あかり「そうですね」

ある女「着いたわ。動物園よ」

あかり「ここにわたしの夫がいるんですか」

ある女「ええ、ここにあなたの夫がいるわ」

動物園の飼育員である向坂薔薇子、あかりとある女を業務用の懐中電灯で照らす。

向坂薔薇子「コツメカワウソを盗もうたってそうはいかないよ！」

あかり「わたしの夫が消えたんです。わたしにジョークを聞かせたあとに、この停電の夜の只中に立ち消えてしまったんです。そしてこの人が夫が動物園の車に乗るのを見たところある女「見た」

あかり「コツメカワウソには指一本触れません。夫を探させてください。お願いします！」
向坂薔薇子「(煙草を口にくわえ火を点け吸い煙を吐き) ふうー。あんたはあんたの人生の主役かもしれない。でも残念なことに、わたしの人生の主役じゃない。コツメカワウソの人生の主役でもなけりや、○川×男の人生の主役でもない。○川×男の人生の主役は、○川×男さ(顔をしかめ煙草を吸い、吐く) ふうー」

あかり「わかります」

向坂蕃薇子「わかってくれて嬉しいよ。話が早い。生憎今は閉園中だね。中には入れない」
ある女「ほほう。あなたの耳はイヤリングをぶら下げとくためにあんのかい？ それともパンの耳といっしょでゴミ箱行きかい？ 聞いただろう？ この人の夫が消えちまつたんだ。協力してくれたっていいだろう」

向坂蕃薇子「んなこと知らないよ。生憎今は閉園中だね。おまけにコツメカワウン泥棒がうろついているという話も耳にしている」

ある女「どの耳だい」

向坂蕃薇子「この耳だい」

ある女「それが耳かい」

向坂蕃薇子「耳じゃなきやなんだっていうんだい」

ある女「あたしやてつきり、寿司かと思ったよ」

向坂蕃薇子「なに言ってやがんだい、このこんこんちきのおたんことんま！ よしんばわたしの耳が寿司だったとして、お皿の色は何色なんだい！」

ある女「群青色に決まってるんだろ！」

向坂蕃薇子「群青色のお皿は一体いくらだっただい！」

ある女「460円に決まってるんだろ！」

向坂蕃薇子「460円！」

あかり「二人ともやめて！ すみません。わたしの夫が、すみません。ほんと馬鹿な人」

向坂蕃薇子「はん！ 半ライス！ 下手に出たって駄目だよ。見ろ！ あの夜空に見えるのがお星様さ。小さなダイヤモンド。手のひらをかざして指にはめてごらん。虚しいから。あなたがいま立ってるこの星、その足で踏みしめるこの星はお星様なんかじゃない。ただの石だ！ 大きな石だ！ 本当のお星様は、いつだって遠くにあるものなんだい。現実を厭しいということですか？」

向坂蕃薇子「解釈はあなたの自由さ。あなたにやるよ」

あかり「(ため息をつく)」

ある女「ため息をつかないで！ ため息は心のおならよ」

向坂蕃薇子「だったらおならは、おしりのため息かい？」

ある女「そうやもしれぬ。田所あかり、大人になる準備はOK？」

曲。

あかり「じゅんびって？」

ある女「ガールからレディーになるための準備よ。アー・ユー・レディー？」

あかり「まあそれなりに」

ある女「イングリッシュ・プリーイイイイイズ！ アー・ユー・レディー？」

あかり「あ、アーハン！」

ある女「お母さん！ すべての子供は母親を犯しながら生まれてくるのですね。生麦生米生卵！ 生麦生米生卵！ 脳味噌がビニール袋みたい。ビニール袋のなかには、死んだクラゲがはいってる。いま海の家ラーメンなんか食べたら、わたし悲しくて死んじゃうかもしれない！」

踊り狂うのは世界。

それがおわり、あかりとある女は動物園の中を早足で歩いている。

あかり「あんなことして大丈夫だったの??」

ある女「時にはルールを破ることも必要なの」

ゴリラの音がする。

あかり「ゴリラの音がする」

ある女「動物園には、ゴリラがいるものさ。ゴリラなんて、ほかに行くところもないのさ」

あかり「少なくとも日本では、動物園にしかゴリラはいない。夜道でぼったり出会うこと

もなければ、回転寿司屋のカウンターで隣になることもない。そう考えると、不思議ね」

ある女「不思議さ」

ゴリラと化した夫、二人の目の前に現れる。

あかり「あなた！」

ある女「危ない！ 下がれ！ これはゴリラよ。あなたの夫はいま、ゴリラになっているの」

あかり「どうして」

向坂薔薇子、あかりの後輩を人質にし、その頭をピストルで狙いながら歩いてくる。

向坂薔薇子「にやにやにやにやにやにや」

あかり「あかり！」

あかりの後輩「あかり、ごめん」

向坂薔薇子「見ちまったようだな。まったく馬鹿な女だ」

あかりの後輩「あたしのことを悪く言わないで！ (向坂薔薇子、あかりの後輩の後頭部を

ピストルの尻で殴る)」

あかりの後輩「ウツ(その場にたおれる)」

あかり「やめてよ！ そしてわたしの夫になにをしたの！」

夫ゴリラ「うほうほうほうほうほ」

向坂薔薇子「なんにも？ バナナジュースを飲ませただけさ（バナナの皮を投げ捨てる）」

あかり「それだけでこんなになるわけないもん」

向坂薔薇子「田所あかり、旧姓高円寺あかり、もう死にたくなかったかい？」

あかり「なぜ名前を知ってるの？」

あかりの後輩「その女の目を見ちゃだめだ！」

向坂薔薇子「もう死にたくなかったかい？」

あかり、ゆっくりと横になる。あかりの後輩、少し離れてそれを体育座りで見ている。
向坂薔薇子は女医となり、あかりの傍に座る。

女医「心は地球という星によく似ています。表層意識という大地があり、潜在意識という

海がある。地球の約7割が海です。あなたが立って歩ける大地は、3割しかありません」

あかり「これは、回想ね。わたしはいま、病院にいる」

女医「いまの気持ちをおしえてください」

あかり「心に、ドーナツの穴が空いていて、そのドーナツには、味が無い」

女医「味が無い？」

あかり「甘くもないし、苦くもない。ドーナツの穴のためだけのドーナツ」

女医「（カルテにメモし）おしえてくれてありがとう。シマウマ、ライオン、キリンに象、

そういった（名前のあるものたち）が大地を走り回っているのと時同じくして、そっと

地球の海の底ひに潜ってみれば、ヴィジュアル的にいささか、グロテスクなものたちが

生きて、蠢いています」

あかり「マリワナ海溝のようなところに」

女医「そうそう。でも心の場合、マリファナ海溝かもしれませんね」

あかり「ダイオウイカがいるんですか？ わたしの心の海の底ひにも」

女医「ダイオウイカ！ てへぺろ。ダイオウイカにダイオウイカという名前がついたのは

ごく最近のことです。でもあなたの心のダイオウイカには、まだ名前がついてないかも
しれない」

あかり「味がしないドーナツを、いつまで食べ続けられるものでしょうか」

女医「高円寺あかりさん、いいですか、諸行無常という言葉はネガティブにもポジティブ
にもなります。変わらないことなどありません。びっくりするほど変わります。良くも

悪くも、小泉八雲」

あかり「小泉八雲はもともとギリシヤ人。フランス、アメリカ、インドを旅し、日本人に
なった」

女医「そういうことです。一寸先は闇です。そして、その闇は、あなたの中にあります」

あかり「わたし次第ってことですか？」

女医「ええ。(立ち)でもあなたにはむりです。むりなんです。どうしてもむりなんです。

死ぬしかありません。どうせいつかは死ぬんですし。とつとつと死ねばいいんです。死ぬ」

あかりの後輩「耳を貸すな！ まやかしよ！」

向坂薔薇子「ちよつと邪魔しないで」

あかりの後輩「その女は術を使うのよ！」

向坂薔薇子「そんなたいしたもんじゃないわ。ここは惑星。惑い惑わされる星、惑星」

あかり「惑星」

あかりの後輩「わーくせー！ わーくせー！ 金木犀はわーくせー！ 金星木星は惑星！」

あかり「ハッ！」

ある女「お見事」

向坂薔薇子「チッ」

ある女「目にもとまらぬはやさで銃を奪います(目にもとまらぬはやさで銃を奪い、向坂

薔薇子に向ける)。なにが目的なんだい！ 喋りな！ 舌があるうちにね」

向坂薔薇子「小癩な！ ……ふふふ。ねえ、象はなんで、ばおんばおん鳴くんだと思う？

悲しいからよ。象は悲しいの。なんで象、悲しいの？」

夫ゴリラ「ニンゲン、シゼン、コワス！ ニンゲン、ゾウ、イジメル！ ニンゲン、コベ

ツカイケイ、スル！ テイインサンニ、メイワク！ ニンゲン、ユルサナイ！」

あかり「ああ、あなた」

向坂薔薇子「そうね、そうよね。人間は愚かよ。地球温暖化をフィクションだと信じこみ、

海鳥の胃袋をゴミで満たし、アマゾンの森を焼き尽くす！ アマゾン！ アマゾンプラ

クイム！」

夫ゴリラ「うほっほっほっほっほっ！」

向坂薔薇子「虚構のアマゾンは繁盛してても、本当のアマゾンは灰になって舞っている」

夫ゴリラ「咆哮」

あかり「お願い人間にもどって！」

夫ゴリラ「懐中電灯の光を浴び」マブシイ！ マブシイ！ デンキ、スコシデイイ。トウ

キョウ、アカルスギ！（ドラミング）」

向坂薔薇子「人間どもめが！ グレタさんの言葉に耳を傾けなさい！」

あかり「グレタさん？」

向坂薔薇子「国連でスピーチをした16歳の少女、グレタ・トゥーンベリさんよ！ ああ、

彼女は正しい。この世で正しいのはもう彼女だけ」

ある女「唇の端っこが白い！ この女おかしいわ！」

向坂薔薇子「黙らっしゃい！ 頭がおかしいのはお前たちのほうだ！ いつまでも大丈夫

だと思ってるお前たちのほうだ！ 厄病神の手長猿！ 身の程知らずのちんちくりん！

その毛のないつるつるの手をどこまでもどこまでも伸ばして、遠くにあるものを掴みた

くて、もうとつくに手なんかありやしないのに！ 打つ手も手札もありやしないのに！」

あかりの後輩「ごめん！ あたしが人類を代表して謝る！ ごめんね！ ごめんなさい！
でも人間には人間の生活があるの。ささやかな幸せがあるの。いきなりゴリラにはなれ
ないの」

向坂蕃薇子「悪いがなくてもらう。バナナにごく少量含まれるゴリラニナルという成分
を抽出してケミカルなバナナジュースをこさえた。手始めにこいつに飲ませた。成功よ」
あかり「なぜうちの夫に！」

向坂蕃薇子「たまたまのたまよ！」
夫ゴリラ「うほっほっほっほっほっほっ！」

向坂蕃薇子「同様のバナナジュースを、世界中の水道からうっすら流してやる！ みんな
うっすらゴリラになる。やがてがっつりゴリラになる」

ある女「うそこけー。そんなB級映画のバッドエンドみたいなこと、できるわけないよ！」
向坂蕃薇子「わたしには世界中に協力者がいるの。ほんとよ？ 人類みなゴリラになった
ら、わたしもゴリラニナルを飲むわ。そしてゴリラになる。では諸君、さらばなのだ！

(颯爽と走り去る)

ある女「撃つ。が弾が出ない)ちっ、小道具の銃だ……」

あかりの後輩「あかり」

あかり「うん。あなた」

夫ゴリラ「ほっほっほっ」

あかり「わたしの名前、わかる？」

夫ゴリラ「ほっほっほっ」

あかり・あかりの後輩「あかりよ、あかり」

夫ゴリラ「ほっほっほっ」

あかりの後輩「だめだ。わかってないよう」

あかり「あのときといっしょよね。名前は知らないけど、あなたという星は見えてる(夫の
頬にふれる)」

曲。

夫ゴリラ、夫になる。人間のからだに馴染む。

夫「あかり」

あかり「あなた！」

あかりの後輩「奇跡だ！ ねえ奇跡！」

ある女「よかったよかった」

夫「悪い夢を見ていた……(伸びをする)あーああ！ もつ鍋が食べたい気分だ。俺、今

すぐく、もつ鍋が食べたいよ！」

ある女「食べたらいよいよ」

あかり「食べましよう、食べましよう」
あかりの後輩「(ケータイを出し) もうお店予約しちゃうね」
あかり・夫「ジャンジャジャン！」
あかり「お帰りなさい」
夫「今なら反復横飛びだってできそうだ。それ！」

夫、反復横飛びに挑戦しバナナの皮で滑って転んで頭を打って白目を剥いて痙攣する。

あかり「あなた！」
あかりの後輩「あー」
ある女「バカだねえ」
あかり「(駆け寄り) あなた！ あなた！ あなた！」
ある女「バカだねえ」
あかり「救急車を呼んで！ どうか救急車を！」
ある女「(電話しようとするが) あーだめだ。まだ圏外だ」
あかりの後輩「うん。もつ鍋の予約もできない」
あかり「どうして!?!」
ある女「今夜の停電も、あの女の陰謀の一部だったのかも」
あかりの後輩「そんなまさか」
あかり「とにかく呼んで！ なにかを呼んで！ 彼が死んじゃう！」
ある女「わたし、病院まで走る！（走る）」
あかり「優しい！ 優しい！ ありがとう！」
あかりの後輩「あかさたなはまやらわ、おそとのほもよろを。どうやらこの地球という星の重力は、なかなかどうして重いらしい。あたしにはよくわからない。だけど未来のわたしのからだには、ちよっと贅肉がつきすぎている」
あかり「生活で精いっぱいなもの。手いっぱいなもの。目いっぱいもの。いっぱいいっぱいなもの」
あかりの後輩「だから月にゃあ飛べやしない。飛べやしないんだ。……この人がいないと」
ある女「(戻ってきて) 救急車連れてきたよー！」

ある女、夫の足をひっぱり、ずるずると引きずる。心電図の音がしてくる。

ある女「病院だ」
あかりの後輩「病院だ」
あかり「あなた」
ある女「いまは意識がありません。意識が戻るかもしれないし、戻らないかもしれませんが」

あかり「え？」
ある女「ナースの柏餅と申します」
あかり「柏餅さん」
柏餅「意識が戻らなかった場合、ご主人は植物人間になります」
あかりの後輩「植物って……」
あかり「アロエ」
柏餅「え？ はい。どうなるかは神様にしか分かりません。神様に祈りましょう。それでは」

柏餅、部屋を出て行く。
あかりとあかりの後輩と夫だけになる。

あかりの後輩「動物になったかと思ったら、こんどは植物だなんて」
あかり「まだわからないわ」
あかりの後輩「うん。なんか話しかけなよ」
あかり「なんだろう。なにを？」
あかりの後輩「なんでもいい。いま心に浮かんだこと」
あかり「……（夫に）ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水に非ず。フードコートとかにある、無料で水が飲めるところって、まるで女優よね。ミズノミキってね。あはは。今夜はとても疲れた。いま何時？」
あかりの後輩「深夜、二時半」
あかり「ああ、眠い。脳からきな粉の味がする。人生ってまるで、運動会ね。走ったり、跳んだり。順位もつけられる。参加することに意義があるっていうけど、苦手な人には罰ゲーム。BGMは♪天国と地獄。まさに天国と地獄。あなた、わたし、あの夜浮気をしたわ」
夫「……」
あかりの後輩「え」
あかり「そうよ、あなたの言った通り。その人のことが好きすぎて好きすぎて死んじゃいそうだったの。あなたよりかっこよくて、あなたより賢くて、あなたより優しい人なの」
あかりの後輩「嘘つき」
あかり「ごめんね」
あかりの後輩「自分まで騙してたのね」
あかり「セックスと、中華。不倫はプリンより甘い」
あかりの後輩「汚い！ 汚い大人！」
あかり「ええそうよ！」
あかりの後輩「あんたみたいになりたくない！」
あかり「なるのよ。あなたはわたしになるの！」

あかりの後輩「ならない！ なってやるもんか！（立ち上がる）」

あかり「なによ」

あかりの後輩「さようなら」

あかり「どこに行くの？」

あかりの後輩「ここではないどこか」

あかり「え？？」

あかりの後輩「さようなら、さようなら」

あかり「待ってよ！」

あかりの後輩「なによ！ どうせ、どうせあたしのことが嫌いなんでしょう！？」

あかり「……嫌いじゃない！ あなたみたいに、（涙ぐんでくる）あなたみたいになれたら

どんなにいいかって……、どんなにいいかって！ 懂れてた！ わたしあなたに懂れて

たの！ 行かないで！ お願ひ行かないで！」

あかりの後輩「……あたしはあたしの道に行く」

あかり「お願ひ！ お願ひします！ ああああ！」

あかりの後輩「……元気でね」

あかりの後輩、部屋を出て行く。

あかり、泣く。静かに、すぐ泣く。やがて「ああああ」と声を出す。嗚咽する。

夫、意識があるのかないのか判らない目で、それを見ている。あかりは夫を見ない。

あかり「ああ夜よ！ 今月今夜のこの夜よ！ お前はなんちゆう夜なのか！ なんと夜夜

しい寄る辺ない夜なのか！ ああ、ああ……」

いつのまにかいた女「こんばんわ」

あかり「……」

いつのまにかいた女「私が夜よ。私こそ、夜。夜の女と書いて、ヤージョ。ヤージョだお

（頬に指をあてる）」

あかり「お前……」

いつのまにかいた女「お前？ お母さんよ？ やっとお見舞いきてくれたと思ったらなん

の騒ぎ？ 起きちゃったわよ」

あかり「（また涙がこみ上げてくる）お母さあん！」

母「しーっ！ 夜に騒ぐと、ピーマン男が来るよ」

あかり「あーん！」

母「どうしたの？」

あかり「自分に裏切られた。裏切った」

母「よしよし。いいこいいこ。大丈夫。どうせ、みんないつか、死ぬのよ。みんな死ぬの。

絶対死ぬから。それまでは人生を楽しみなさい。ねえ、知ってた？ 自分の人生を楽し

んでる人が、いつちばん偉いのよ!」

柏餅「顔を出し」あ、高円寺さん起きちゃいました? お水飲みましょうか」

あかり「あ、わたしもください」

柏餅「はい」

母「ありがとう。(あかりに) この世はまるで、終電を逃した火星人ね」

あかり「終電を逃した火星人? どういう意味? まるで意味がわからない」

母「そう! まるで意味がわからないってこと」

あかり「(笑って) なんなのもう」

母「だから良かれと思ってやるしかないのよ。いつだってそう。なにもわからないままに、良かれと思ってやるしかないの。それしかできないの。あとは良かれのセンスを上げるだけ」

あかり「センス?」

母「そ。それでこれは扇子(あおぐ)」

あかり「うちわだよ」

母「火星人が見たらいっしょよ(あかりの顔をあおぐ)」

あかり「風」

母「旦那は元気?」

あかり「元気じゃないよ。あそこにいるよ」

母「あら、目が死んでるじゃない。もう別れちゃえば?」

あかり「いやだ」

母「どうして?」

あかり「わたし、あの人といっしょにいと、死にたくならないの」

母「そ。じゃあいっしょにいなさい」

あかり「うん」

柏餅「はい、どうぞ。お水です(二人にコップを渡す)」

母「ありがとう」

あかり「ありがとうございます」

母「これ、売ってるお水?」

柏餅「いえ、水道水です」

母「そ(飲む)」

柏餅「明日はけっこうあったかいみたいです。今日と比べたら。お散歩いきましようね」

あかり「お母さん」

母「ん?」

あかり「わたし、いつも、なに? たとえばなんだけど、上の句にたいして下の句を求められてるような気がする」

母「ああ」

あかり「上の句はまさに、神が考えてるの。神の句なの。でもオチをつけるのは、いつもわたしなの」

母「大喜利じゃん」

あかり「そう大喜利なの」

母「やなの？」

あかり「や」

母「バナナの皮悲劇って知ってる？」

あかり「ん」

母「バナナの皮悲劇。アフリカの奥地の、ふつーにゴリラとかがいる地方に伝わる、諺」

あかり「諺？」

母「そ。バナナの皮で滑った拍子に、奇妙な踊りを踊らされちゃった、つー意味なの」

あかり「へー最悪じゃん」

母「そんな踊り踊りたくないわよね」

あかり「そんな踊り踊りたくない」

母「でもこの星ではみんな踊ってる。踊らされてる」

あかり「みんななんて知らないよ」

母「うん」

あかり「なにが言いたいの？」

母「バナナの皮で滑って転んで踊らされることは避けられないけど、もしもあなたが個人的に、ごく個人的にその受動的な踊りを楽しむことができたならば！」

あかり「タラバ？ 蟹？」

母「心から楽しむことができたならば！」

あかり「蟹」

母「できたらば！ できたらば！ 逆説的にそれが我々の自由意志であり、運命を変えることになるよ！」

あかり「突然頭の上からアロエの植木鉢が落ちてきて死んじゃうようなこと、どうやって

楽しむのよ？！」

母「あなたはまだ生きてるでしょ」

あかり「……」

母「死んだ人のことはわからない。想像もできないほど美しい世界にいるのかもしれない。お前ごときが、思いあぐねるな。お前ごときは、生きてるうちは、生きてくれよ。ばか」

あかり、コップにはいった水道水を飲む。

あかり「いま何時？」

母「深夜、三時」

あかり「今夜はとっても疲れちゃった。みんながわたしに、目覚めることを諭してきた。

……でも、……いまわたしに必要なのは、……眠りなんです。……眠らせてください。……
目覚めるために」

あかり、横になり、目を閉じる。

母も寝ている。

ややあつて、あかりの後輩やつてきて、あかりに毛布をかけ、去っていく。

闇。

間。

母、起き上がる。

母「……うー。……うほ。……うほほ。……うっほっほっ。……うっほっほっ、うっほっほっ、

うっほっほっ、うっほっほっ、うっほっほっ、うっほっほっ、うっほっほっ、うっほっほっ、うっほっほっ
ほっ（ドラミング）」

そして、みんなゴリラになる。舞台上がゴリラで溢れる。

おわり